

## 1. はじめに

**1.1 目的；** 著者は、市民参加(主導)の社会づくりに向けて、市民と専門家のあり方、街づくりや社会づくり、等をこれまで検討して、市民力向上とそれによる社会意識の形成が必要と主張し、今後に向けて、市民力向上のためには何が必要かを模索していた。

ここでは、上記の課題解決に向けて、市民の位置づけや市民行動などの市民問題を整理し、市民力向上に関する学びの環境について概観することにより、建築系問題(暮らしや街づくり)についても基礎固めをすることとした。

**1.2 問題の所在；** 住まいや街づくり等においては、市民視点を如何に発揮させるかが問題となっている。以下に記す。

- ・市民視点の霞みがち、市民参加の実効しにくい理由
- ・市民視点の定着として社会意識形成目指し、市民力の向上や専門家の市民への配慮向上を検討

**2. 市民論；** 市民の実像についてまとめる。

### 2.1 市民

**(1)市民；** 市民とは、社会を構成する主権的主体的な人間であり、社会の主人公であり。また市民の市民たる条件には、主権と主体があり、社会の構成や社会づくりに加え社会活動を担うことがあることはいうまでもない。もちろん、市民と社会の枠組みでは、市民個人と社会という組織があることになる。以下に社会の構成員と活動について記す。

- 市民と社会の関係を社会構成の人で記す。
  - ・市民側；市民、生活者、住民、消費者、需要者、(顧客)
  - ・専門家側(市民以外)；専門家、事業者(生産者)、行政

b. 社会活動；市民の生活と専門家等の事業なる活動

**(2)生活者；** 日常の生活を営む(暮らし)市民を特別に生活者と呼んで、暮らしにおける生活者の役割を記す。

- 生活の充実；生活行動(消費行動)や生活空間(環境)の健全化および精神活動において人間性の向上を図る
- 社会を築く；生活者の意識が集積して社会意識を形成する。生活者として社会活動には市民参加や職業参加あり。

**(3)市民問題への対処；**暮らしで培われた市民視点での

対処。

**2.2 社会づくり；** 社会をつくるのは市民であり、専門家は専門をもって市民を支援する。この観点で社会づくりを展望。

#### (1)市民団体の社会活動

- ・目的別活動；生活、福祉、街づくり、公害問題、他特に街づくり系を中心に社会変革的活動
- ・行動には；示威、署名、交渉、抗議、訴訟、他

**(2)市民個人の活動；** 市民個人としては、市民団体への参加にて上記活動に携わることもあれば、個人のままで示威、署名、WSなどへの参加もある。

#### (3)コミュニティでの生活

生活(暮らし)そのものも市民活動といえる。

以下に記す；

- ・不条理に抗議する生活行動(不買、抗議、他)
- ・コミュニティづくりに生活者として参加・実践
- ・種々コミュニティにて市民センスの醸成

**(4)市民としての社会意識づくり；**知性と感性といった社会性素養が市民の暮らしからの学びにより磨かれる。これとともに市民活動の積み重ねとして社会意識が形成され定着すると考える。

### 2.3 市民行動 対決的姿勢から社会雰囲気づくりまで

#### (1)推進側への直接行動；相手は行政や特定企業

- 対決的行動；市民直接行動として、示威、署名、談判・抗議があり、幅広い活動としては、賛同者結集、マスコミ協力要請、啓発活動がある。
- 社会システム利用；行政による市民向けの種々の制度の利用する手がある。
  - ・公聴会・説明会参加、
  - ・意見公募に応募(パブコメ他)
  - ・住民監査請求や訴訟、・対話集会参加
  - ・行政の各種委員会に委員として参入

c. 協調的モード；行政との共創や協働として市民参加

**(2)社会雰囲気醸成モード；**世の中を市民主役のモードにつくりあげる。これには、開明的な専門家との協働での世論づくりと市民力向上による社会意識形成とがある。

**2.4 市民参加；**市民参加とは、政策立案や意思決定に際し、行政と市民との議論により合意形成までもって

いく行動のこと。これには団体を介した参加と個人の参加がある。記す。

**(1)市民団体**；地域・社会の課題を市民側での解決を目指す活動組織であり、市民生活向上や社会不条理是正を掲げて社会を動かす団体である。こうした問題対処の団体としては、社会環境改善支援会議(街づくり他)や福祉団体や消費者団体、他がある。なお、町内会は地縁団体である。

**(2)市民系外の団体等とのタイアップ**；これには、開明的な専門家団体とタイアップで共同戦線を張ることができる。

**(3)市民個人の参加**；教育系や事業系の主導する市民対象の場に市民個人で参加の形態もある。

**2.5 市民の参加の様相**；市民参加について、市民主導の行動的なものと市民ポテンシャル向上としての勉強会的なものがある。後者は市民参集の形態である。

**(1)市民の参加について**；これには戦闘的な市民参加とそうでない市民参集がある。後者については、参集とは市民主導でない市民の参加のことであり、専門家主導(や行政主導)の市民参集WSなども含まろう。

**(2)市民会議**；これもまた項目(1)と同じく二種類ある。

a. 市民WSなる市民会議

欧州では直接民主主義の一形態として、無作為抽出で選出の住民による議論を通して行政に施策提言するという市民議会が脚光を浴び、日本では札幌市がSDGs系統のWSの市民会議が全国に広がっている。会の主導は教育系や行政側であるためか、会の内容は市民学習の色が強いこともある。

b. 市民会議；これは、市民が主導で行政と直接団体交渉し、問題解決を図る活動組織である。参加者の主体性を基本とするので、形態は会議形式となる。例として、京都街づくり市民会議が活躍している。

**(3)行政の市民参加への姿勢**；行政による市民対象のイベントに市民の参加をもって市民参加とっていた頃があったが、最近では市民の声の反映とか市民との協調・協働などが定着してきている。しかしながら、行政側で市民参加の受け入りに難があるとされているのは、市民視点の考慮が手間暇やスピード感欠如につながるから。少しずつ改善はされていくかと。

## 2.6 市民力向上；

**(1)市民力**；市民力とは市民が地域(及びネットワーク)を担う力のことであり、市民力が発揮される対象は、コミュニティづくりと運営、行政・企業との交渉、社会

的行動、他であり、また市民力の宿る場は市民参加(主体、主導)、コミュニティ(ネットワーク含)、暮らし、他にあると考える。

**(2)市民力の向上**；これには、主体性とコミュニティ形成をもって

「市民主体性醸成⇔主体的コミュニティ形成⇔市民力向上」と図化できよう。また、暮らし(コミュニティ)での学びと実践を通して社会意識形成も図られよう。もちろんそこには、知の背景には種々の教育があり、暮らしの実践をもって市民の意識醸成ありとしている。これをもって、街づくりや地域づくりへの積極参加そのものが可能となると考える。

**(3)市民として教養力向上**；市民の教養力向上には生涯学習や生涯教育がある。これらは、自己の能力向上はいいにしても、学びの活かし方が不十分である。多くの関係機関はそこに苦慮しているのが実状である。理由は社会性の議論が不十分だからである。この点の解消には、新たな視点として、社会性を認識し、日常からの学びあげとして生活の営みを捉えていきたい。後出4章。

## 3. 市民を取り巻く問題

### 3.1 問題概要

**(1)生活を揺るがす問題**

a. 生活問題には生活営み、環境保全、地球環境、他があり、具体的には、生活営みとして消費者問題、環境問題として公害問題、原発問題、再開発問題、地球環境問題としてSDGs、地球温暖化、脱CO2、他、目白押しである。

b. 取り組みの多岐多様はいいが、基本は市民をどう守るかであり、この観点から環境問題や生活保全問題などとして俯瞰と深堀の対応が要と考える。

**(2)推進側あるいは専門家側によれば、他分野との連携や市民との協働といったことが叫ばれている割には、問題の根源が問われないことを憂う。(例えば成長路線批判)**

**(3)対象の問題**；事業者と生活者の枠組みで市民の役割を考えるために、以下の最近話題3点を扱う。

・生活問題(消費者問題) ・都市環境問題 ・環境問題(SDGs)

**3.2 生活営み(消費行動)**；生活者問題(消費者問題)については、消費者が消費行動を通して社会参加している点を重要視したい。(以降、消費行動の言葉も使用)

**(1)消費者問題の根源**； 消費者問題には社会構造に起

因した社会矛盾が現れていると捉える。問題解決としては、倫理や道徳に比して社会的対応が不十分である。このため、個々の問題において解決に成果があがっている割には社会システムの改善機運があまり高まらない。それゆえ、根源的な対応としては、社会システムづくりが必要と考える。

(2)消費行動；問題の本質には、生活者の生活防衛という能動的姿勢の形成が必要であるにもかかわらず、消費者という文言にあるように、問題の本質が矮小化ぎみとなり、受け身的な姿勢が強いられぎみである。改善運動は、生活者の主体行動として社会への市民参加の定着へと持っていきたい。

(3)生活次元から社会理念づくりへ、社会意識と倫理・倫理；最近「倫理や環境に配慮した」消費行動の概念が脚光浴びているが、今必要なのは「考慮」ではなく「倫理や環境づくりに参加」することである。そのためには社会システムづくりや政治の次元まで市民からのコミットが要といえる。

また社会における倫理そのものの機能については、明らかに誤った施策や技術欠陥の是正は倫理問題で対応可能といえる。しかし、グレーな問題ではグレー範囲の企業活動が社会であたかも容認ぎみであることが問題である。例えば、農薬漬け農業、原発事故の無責任体制、公害等において。

・社会意識；問題対応については社会からの自制力や対応力が社会における見識や良識といった社会意識をもって機能することになると考える。

### 3.3 都市環境問題(再開発問題)

環境づくりの問題(街づくり、都市づくり)；人間に安心安全で快適な魅力ある環境づくりとして、建築系からはどうあるべきかの論議が継続的に必要であるが、現状は十分ならずである、すなわち、都市をどうしていくのかの基本論が推進側のみで論じられているだけに、再開発再検討の声が各地で高まっている。地域の活性化でリニューアルがまわりまわって地域民にもという理屈は相も変わらない。以下に神宮外苑再開発における推進側や市民の姿勢を記す。

a. 再開発の実像；実際は商業活動推進であり、恩恵を受けるのは「デベロパ」や商業者といわれ、しかも自治体は住民側よりも推進者側に加担することが多い。

b. 推進側；商業活動促進や資産運用として  
都の活性化貢献

自治体側；賑わい創出として推進側企業に種々便宜  
特区設定、高さ制限大幅緩和(超高層)、

公有地提供、

地域貢献者への見返り提供(容積率大幅増)

地域環境大幅改変(自然環境縮小、森林伐採、  
道路変更)

c. 市民側(計画見直し、良識専門家とともに)

自然保護、樹木伐採論外、経済優先でなく市民環境充実、 都は利益者団体よりも都民第一に

**3.4 地球環境問題；**地球環境問題として特に重要なものは、CO2 排出による地球温暖化問題である。

建築系における脱 CO2 については、エネルギーロス排除のための建築高気密高断熱化やセメント生成過程での CO2 削減、他が進められているが、大規模再開発にあるように意に沿わぬ建物を壊し新築を進めるといふ SDGs の理念と反する行為が堂々と進められてもいる。また、エネルギー系でも再生可能発電よりも原発にあっさり舵が切られた。こうした状況は全体的にチグハグであり、整合性ある対応が待ち望まれている。以下に、各層が SDGs にどう取り組んでいるか記す。

a. 事業側；(成長路線を維持しながら)生産活動に CO2 量削減を考慮。市民側へは SDGs 製品購入や市民意識変容の仕掛けに乗ることを要求。

b. 市民側；市民側では消費行動を通して社会に参加としている。身の回りでもレジ袋不要、等で SDGs に貢献。市民側から事業側には脱 CO2 には安心安全の観点で取り組み要請。

c. 争点；SDGs 取り組みは当然だが両側のスタンスに相違あり

事業側ではゴールありきで実施方法を検討、原発回帰もあり。

市民側では SDGs の方法や全体バランスにも市民視点で。問題としては、欲望制御の不問、開発と環境のバランス欠如、技術解決の限界がある。脱成長路線見直しを社会制度改善で。

d. 研究者；問題解決には消費を抑えるとして江戸期や高度成長期前に戻れの説あれば、技術革新で難局に対処の説もあり。

## 4. 学びの環境

### 4.1 市民素養について

(1)市民素養；本稿のいう学びとは教育ではなく素朴な学びのことである。素養とは暮らしの上での「知性と感性」(他の言い方では「教養と感情」等)であり、暮らしの中で学びや感覚で培ったものの総称ともいえる。これが社会の意識の総体になっていく(社会意識)と考えて

いる。

## (2) 市民と専門家の枠組みでの対応

- ・専門家も学び；暮らしから学びは専門家といえどもある。
- ・専門行為；市民による社会づくりには、専門行使にも社会センスが要とする。そこに市民と専門家との協働がある。
- ・専門家の専門行為には社会センス加味で。もちろん、専門として深い対処で、自己研鑽や専門(継続)教育も要。
- ・市民と専門家の両者が混ざり合いのケースについて。社会センスとコミュニティ構成でそれが可能となろう。そこでは、市民と専門家(多種専門)が垣根を越えて混交があろう。

## 4.2 制度としての学び；若干、制度としての教育をも記す。

**(1) 市民側：**市民対象として一般教養や専門早わかりの教育や学びあり、制度としての教育や暮らしの中での学びを言及。

a. 制度(組織的)；大学や行政ならびに両者連携として市民向けの教育がある。これは、市民教育や市民学習の名称であるが、非市民主導であり、市民が自主的に社会貢献する所まで言及されていないことが多い。市民にとっての効果は；

教養修得；素養向上、

時代の趨勢を理解する教養修得

専門性修得；市民に大学で開講の科目の履修、他

b. 非制度(節 4.1(1)再掲)；暮らしの中での気づきや学びというものは、住まいや街は当然にして各種機能集団(職場など)の場にもある。後者の学びの場を総称してコミュニケーションのコミュニティと呼び、これにはカフェ、サロン、フォーラム、他がある。

**(2) 専門家側：**専門家が市民との寄り添うことによる学びが形を変えて専門家側にフィードバックされる。以下に記す。

a. 専門家側；学校教育以降、職場を超えての専門家対象の教育として大学や学会主導の教育があり、継続教育とカリキュラム教育と呼ばれている。そこでは、時代に対応の専門教育がスキル中心に実施されている。もちろん、そこには市民に寄り添う視点はあまりない。

b. 専門家の市民への寄り添い；これはどう実施されるのか。学びや交流について市民と専門家が触れあえれば、寄り添いは自然と醸成されよう。そのためにも、コミュニケーションのコミュニティへの参加が要となろう。

**4.3 生涯教育；** a. 建築系の生涯教育；これには二種あり、ひとつが一般人(子供含む)の建築教養の教育(街づくりも含む)であり、今一つが現役職業人対象として継続教育である。前者は市民子供教育や街づくり教育とも呼んでいる。よって、一般人への建築教育は市民教育そのものであり、社会・市民への建築や都市に関わる情報発信・普及啓発活動から構成され、具体的には街づくりや住まいへの知見を深める「住まい手教育」となっている。子供教育については、若年層対象の建築全般の建築教育として建築後継者発掘をも狙っている。 b. 継続教育；現役職業人に対し時代の進歩に対応する教育である。(生涯教育と呼ばず、節 4.2(2)参)

## 4.5 コミュニケーションのコミュニティ

**(1)**生涯教育や生涯学習については、市民の教養や専門理解の向上として、主催組織主導だが、効果も大いにある。一方、市民主導の場での学びについては、人格尊重のもとでの対話として多層的・自主的・自由思考可といった効果がある。

**(2)**市民行動にどうつながっていくのか。自由闊達な学びが知性と教養、センスと感性の磨きとなって、市民の在り様が構成されていくと考える。そこには、禅問答ではなく、余談雑談歓談のイメージで十分であり、また積極的な場として各種カフェ等における談義があれば、自分の意志や思考、センスや感性の磨きや、自他ともに発表・傾聴を繰り返すことが可能となる。

## 4.6 問題対処の積み重ねで市民力向上

身近なところでの対応と当たり前の対処を基本とする。

**(1)**市民力向上は身近に問題対処する事から始まる。すなわち、いきなり向上を図る議論でなく、ごく普通の論議の積み重ね、意識向上や素養向上へとつなげる。これには、理詰めでなく感覚的に対処するので、感性というセンスが育成されることになる。

**(2)**当たり前のことを当たり前主張。それが暮らしの下での発想がある。一つには、市民生活維持をもとに安心安全な生活確保をとして、例えば物価高や不安危険に抗議し、社会変革にも言及していく。今一つは、生活の向上(質と量の向上)を目指して、人間本来のセンス源を醸成させ、生活に根差した欲を原動力として、意欲のパッションならびに理性を活性化させて向上活動を可能にすると考え。ただし、欲望は目的化させなければ、市民生活の段階では制御可であり、理性は本来その延長上にあることになる。

(3)市民と専門家の行動心理を記す。

- ・市民は感性的な対応。  
市民という本能的な生命活動
- ・専門家は理性での対処。余裕による欲望の創出

(4)推進側の格差対応

事業推進側の社会活動には、格差を(結果的に)前提にして格差が生産活動の緩衝体となるかのようにも見える。

## 4.7 社会センスと学び

(1)社会センスの意味と働きについて記す。

- ・社会センスの根幹は自明でかつ自然法的な事象にあり、人間としての生き方や真善美が素養の根幹になる。
- ・市民センスの磨きとは社会性の認識であり、その認識とは学ぶ側の自主性尊重から自然に身に付くと考える。
- ・市民センスからの社会意識形成の効用には、専門家が市民センス配慮の下で専門行為するとき市民センスが反映されることが挙げられる。

(2)学校教育と暮らしの中での学び；

- ・市民素養のベース形成；学校教育や職場教育、地域教育などが下地となって暮らしにおける学びが相乗的に功を奏す。
- ・学校教育等へ；暮らしの中での学びは市民感覚で情熱的思考やセンスに呼応する形でフィードバックすると考える。専門家教育へのフィードバックについても同じと考える。

## 4.8 社会風潮を変える

意識の問題として市民と専門家の意識を概略まとめる

(1)専門家(や事業体)の市民への先導姿勢；これには市民に仕掛けるのと市民に押し付けるの二種あり。第一については、市民の意識変容を(推進側が)しかけることであり、これには市民の意識制御につながる(市民無視の姿勢)傾向がある。第二には、専門家側の都合優先で専門行為。専門家自らの主張が通らないとき、市民の専門意識の欠如を非難する。いずれの場合も、市民は暮らしの専門家として市民とは対等かつ尊重したタイアップでのぞむべきである。

(2)市民には意識低く強いられがち；上記の例は、市民の上位に推進側あるいは専門家側があるという自らの認識不足を指摘したまでの事である。すなわち、市民の意識が低いと見えるならば、それは強いられた(社会)雰囲気の結果である。だからこそそうした雰囲気を取り除くこと肝要といえる。

ではどうするか。市民側が市民主体の語りの場などを含め津々浦々で語りを進め、社会変革のセンスを熟成させていくことになる。

**5. おわりに；** 市民主体(主導)の社会づくりに向けて基礎準備のために、市民行動などの市民問題および市民力向上に関する学び(センスや意識)について整理した。以下に記す。

<1>市民と専門家における学びの場の特徴

- (1)市民側；暮らしにおいて(住まい、街、種々機能集団)、コミエカのコミュニティにおける自由闊達な学びに、気づきや感性(センス)の磨き
- (2)専門家側；必要なのは問題対処の健全な姿勢と、市民側への寄り添い対応が専門家の素養の磨き

<2>市民センスとその波及について

- 市民センス；・根幹は社会性のある知性や感性であり
- ・社会性の認識は市民側の自主性尊重から。
  - ・市民センス育みが社会意識形成に、専門家にも波及。

<3>意識問題として市民と専門家の意識の概略

- (1)市民主体を我田引水とする専門家(や事業体)の存在。彼らの市民のニーズづくりには市民に意識同質の強要。
- (2)市民には意識低く強いられがち。市民の低い意識ありと見えるのは強いられた雰囲気の結果。雰囲気除去には健全な社会意識の形成が要。

<4>コミュニケーションのコミュニティの意義

- ・積極的な交流場としてコミエカのコミュニティでの語り合い。
- ・自由闊達な語り合いでセンスや思考磨きを経て社会意識形成

△市民論等で多くの方々のお世話に。記して謝意を表します。

## 付録 生涯教育とコミュニケーションコミュニティ、富山の場合

### A1 地域における生涯教育

生涯教育は地域ごとに実施されている。その特徴を把握するために富山の例を引き合いに出す。

(1)目的と実施主体；目的は高度に発展する社会において必要な知識を得ること、実施主体は県の以下の各部局である。

- ・教育委；一般市民へは教養取得  
→社会の民度向上にも
- ・労働局；勤労者に就労支援  
→離職者対象職業訓練
- ・経営管理；人生100年時代教育  
→産学官連携別カソ教育、大学講義受講可

(2)一般市民を対象の教育システム「県民カレッジ」

最近はどこかの市町村でも、市民大学、町民学園、等の名称で実施している。県の場合では、単発や連続の講演会やシブが、各種の教養講座開設や、主的運営の学び・交流場「自遊塾」(草の根講座、アットホーム 95 年～)があり、講座分野は生き方、健康、社会、歴史、海外風情、等である。

(3)街づくり系について;生涯学習というよりも生活向上の知識吸収とか実践の魅力満喫といったところである。活動主体については、大学が地域において街づくり実践を実施しているが、自治体が関与する場合は学官連携となっている。

が滲み出てくる。

(3)種類;自由奔放語りの場には朝活やゆったりカフェがあり、大域的方向性を持ったカフェには社会科カフェ、哲学カフェ、まちかたり場、地震せけ、他がある。運動体には、ワールドカフェ、憲法カフェ、他がある。

## A2 コミュニケーションのコミュニティ

### 1 概要

(1)富山にて;富山で7ヶ所(著者主催2ヶ所)、他は未確認

名称;朝活、街中ゆったりカフェ

設置目的;日頃の生活にインテリジェンスを求め、語り合うチャンスと場をつくり、大いに楽しむ

狙い;知的交流の世界を足元から広げる、市民参加の土壌づくり

市民の市民による市民のための市民力醸成の場

(2)市民と専門家の協調のコミュニティ

名称;富山地震防災セミナー、北陸こども環境セミナー

目的;「チャンスと場」にて専門性を市民と共に楽しむ

(3)学生と市民・専門家との交流の場

「学生シンポジオン」

建築学会支部大会や全国大会にて、知的交流を楽しむ

### 2 様相:

(1)効用:交流や勉強が場に居合わせたもの同士で楽しむ、また自分と他者の関心事をもとに交流できる。共通時間と共通場において、対話を通して互いの世界を垣間見ることが相互尊重や多様性のもとで意識形成へと発展する。

(2)特徴;人との関係性を通して個の尊重や多様ニーズに対応。コミュニティでは、場所が各地域散在し、参加者は少人数ながら多彩であり、親近感はもちろん気楽さがある。扱う話題は多様性、トピック、卑近、対話は自由闊達、レベル不問、モットーは効率を排した対話であり、過程を楽しむ。これによって、人生や物の見方、感性